

【外国語科・外国語活動】

1 外国語科における課題

- 学年が上がるにつれて児童生徒の学習意欲に課題がある。
- 学校種間の接続が不十分である。
- 進級や進学をした後に、それまでの学習内容や指導方法等を発展的に生かしていない。
- 中・高等学校においては、文法・語彙等の知識がどれだけ身に付いたかという点に重点が置かれた授業が行われている。

【幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について 平成 28 年 12 月 中央教育審議会（答申）】

2 これからの外国語科教育に求められるもの

- グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面の中で必要とされることが想定され、その能力を向上させること。
- 中・高等学校においては、外国語によるコミュニケーション能力の育成を意識した取組、特に「話すこと」及び「書くこと」などの言語活動を充実させること。
- 生徒の英語力では、習得した知識や経験を生かし、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて適切に表現する力を育成すること。

【幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について 平成 28 年 12 月 中央教育審議会（答申）】

3 学習指導要領の主な改善点について

小学校

【外国語活動】

- ・ 実際に外国語を用いた言語活動を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませるようにすることとされた。
- ・ 具体的な課題等を設定し、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、情報や考えなどを表現することを通して、身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養うこととされた。

【外国語】

- ・ 実際に外国語を用いた言語活動を通して、外国語の音声や文字などについて、日本語と外国語との違いに気づき、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによるコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにすることとされた。
- ・ 具体的な課題等を設定し、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、情報や考えなどを表現することを通して、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の簡単な語句や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができるように指導することとされた。

【小学校学習指導要領解説 外国語活動編及び外国語編 平成 29 年 7 月 文部科学省】

中学校

- ・ 対話的な言語活動を重視する観点から、「話すこと[やり取り]」の領域を設定するとともに、語彙、文法などの言語材料と言語活動とを効果的に関連付けて、実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるにすることとされた。
- ・ 取り扱う語彙数について、五つの領域別の目標を達成するための言語活動に必要な、小学校で学習した 600～700 語に 1600～1800 程度の新語を加えた語とし、実際のコミュニケーションにおいて活用する頻度の高いと思われる語彙の定着を図ることとされた。
- ・ 文、文構造及び文法事項について、表現をより適切でより豊かにするなどの目的で、「感嘆文のうち基本的なもの」や「現在完了進行形」など数項目を追加し、実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるにすることとされた。

【中学校学習指導要領解説 外国語編 平成 29 年 7 月 文部科学省】

高等学校

- ・ 五つの領域別の言語活動及び複数の領域を結び付けた統合的な言語活動を通して、五つの領域を総合的に扱うことを一層重視する必修科目として「英語コミュニケーションⅠ」が設定され、更なる総合的な英語力の向上を図るための選択科目として「英語コミュニケーションⅡ」及び「英語コミュニケーションⅢ」が設定された。
- ・ 「話すこと」、「書くこと」を中心とした発信力の強化を図るため、特にスピーチ、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッション、まとまりのある文章を書くことなどを扱う選択科目として「論理・表現Ⅰ」、「論理・表現Ⅱ」及び「論理・表現Ⅲ」が設定された。

【高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編 平成 30 年 7 月 文部科学省】